

ウがある」と後藤弘治副社長は強調する。

ユニオンツールも高精度な金型加工向け工具を出展。現地法人の東莞佑能工具で営業を担当する肥田享佳氏は「現地の安価な工具に比べて劣勢になることも多いが、取引先の工場に立会い、加工条件を調整するなど総合力で勝負する」と力を込めた。

中国東莞国際金型・金属加工・プラスチック・包装・ゴム展示会（DMP）の最大のキーマンは、主催者である訊通展覧の梁天富主席といえる。第13回のDMP 2011では出展者数、ホール総面積、総小間数、来場者数のすべての項目で前年比プラスを達成。中国を中心にアジアの金型13団体が参加する「アジア国際金型産業連盟」の取りまとめ役として、11月16日に開かれた設立調印式の準備にも奔走した。梁主席にDMP 2011を終えての感想、金型連盟設立の背景、今後の展望などについて聞いた。

——13回目を迎えた「DMP 2011」は大盛況のうちに幕を閉じました。

「来場者数は前年比5.5%増の7万5,590人を記録した。出展者数は13%増の1,044社で、2007年以来4年ぶりに1,000社の大台を突破した。ホールの総面積は30%増の64,395㎡、総小間数は40%増の3,781小間にそれぞれ伸びた」

——東莞でのDMP開催はすっかり定着した感がありますが、あらためて同地で展示会を開く意義を教えてください。

「広東省で展開される金型加工や金属加工の仕事は、中国全体の約6割のシェアを占めるとされる。モノづくりの地としての地位は圧倒的だ。なかでも東莞は産業集積地の広州や深圳、順徳などの各都市の中間地点にあり、モノづくりに欠かせない金型や部品の供給基地として近年急速に発展している。地場の金型工場や部品工場に製品や技術の最新情報を提供するのがDMPの最大の目的だ」  
——過去の展示会と比べて、今回のDMPはどんな違いがありましたか。

「中国でも労働力が不足し、賃金も年々高騰してきている。そのため工場経営者は従来型の人手を使った作業から、マシンによる工程の簡素化や自動化を模索するようになってきた。利益を得る



梁天富主席  
（訊通展覧主催者）

ためには日本の工場と同様にムダを省くことを意識せざるを得なくなっており、そうしたニーズをとらえた製品や技術の出展が目立った。また中国政府は持続可能な経済発展を掲げており、省エネルギー対策や二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出削減なども重要テーマになってきている。その対策として環境対応製品・技術が多く出品されたのも今回のDMPの特徴といえる」

——展示会主催者としての立場から見た場合、金型連盟の設立でどんなメリットが生まれてきそうでしょうか。

「各金型団体のメンバーはDMPの主要出展者でもある。DMPの主催者として見れば、今回の金型連盟設立は良質の出展者を囲い込める側面もある。過去のDMPにも各地から金型団体の会長や幹部が来訪していたが、各団体が一堂に会する場をDMPに設けることで、来場者の注目度もさらに高まることが期待される。将来はDMPの併催イベントとしてアジア金型国際会議の開催を目指したい」

——金型連盟では今後、どのような活動を計画していますか。

「まず考えているのは参加団体による視察団の相互派遣事業だ。工場見学などを通じて各地の金型産業の現状を把握し、課題の共有を図りたい。お互いの状況を知ることで、価格や規制の問題、新素材の加工技術などに関する情報交換が活発に行われるようになるだろう。連盟は行政主導ではなく民間主導のため、スピード感を持って事業を進められる。民間交流を促進する中から課題解決策を探っていきたい」